

化学合成したゲノムから創られた細菌、不気味の谷を越えたヒューマノイドロボット、太陽系外惑星に息づく新たな生命の可能性。

40億年の歴史を越えて、地球上に営々と育まれてきた「生命」の定義は、21世紀の先端科学が拓く新たな世界でも通用するのでしょうか。

進行形の科学が迫りつつある生命の先端を垣間見ること、生命を再定義する必要性について、講演者と参加者のオープンディスカッションを行います。

今、「生命」の再定義は必要か？

写真提供：大阪大学・ATR知能ロボティクス研究所

2010年11月13日（土）14:40-16:20 入場無料（登録不要、定員280名）

東京大学 生産技術研究所 An 棟2F コンベンションホール <http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/access/access.html>

主催：「細胞を創る」研究会

1. 講演 「ロボットに感じる生命 - アンドロイド研究が捉える生命の感触」

石黒 浩 氏(大阪大学教授・ATRフェロー)

ロボットやアンドロイドの研究は、人間理解の研究でもある。講演者は人間と関わり、人間の生活の場でコミュニケーションを主体にサービスを提供するロボットやアンドロイドの研究開発に従事してきた。その研究開発において重要なのは、人間にとって最も関わり易いのは、コンピュータや携帯電話ではなく、人間であるという視点である。そのため、研究開発は、ロボット工学のみならず認知科学や脳科学とも連携してきた。

本講演では、これまでに開発した一連のロボットを紹介しながら、それらのロボットが人間のどのような側面を捕らえ、人間理解にどのように結びついているかを議論する。

2. 講演 「メディア空間の生命観～『生命』の定義を媒介する枠組みの現在」

田中 幹人 氏(早稲田大学政治学研究科 ジャーナリズムコース准教授)

本論においては、メディア空間が内包する「生命観」に着目し、こうしたメディア研究、マス・コミュニケーション研究、科学技術社会論研究といった分野における、質的・量的分析の変遷と現在を俯瞰し、続く議論の前提として頂くことを目的とする。

「生命」の定義は、我々ヒトという生命にとっての存立基盤と密着したものであることは言うまでも無い。しかし、だからこそメディアの言説空間においては、「生命」という重すぎる語の定義は後景化する。＜人工細菌＞という生命科学上のシンボルは、ニュース情報受容に際してオーディエンスに認知的不協和を起こすほどの衝撃をもたらす得ないのである。

3. オープンディスカッション

セッションオーガナイザー：橋本裕子（日本科学未来館）